

初対面二者間の会話に見る発話の重なりについて

—相手言語接触場面と第三者言語接触場面における中国人上級学習者を比較して—

陳 新

A Study on Overlaps in conversations between unacquainted people: Comparison of Partner and Third-Party Language Contact Situations by Chinese Learners of Advanced Japanese

Chen Xin

摘要

在日常交谈活动中，有时会出现两人或两人以上同时说话的情况，这种现象就是“话语重叠（overlaps）”现象。本稿作为阐明日语学习者话语重叠现象的基础研究，调查了在「初次见面」谈话中，中国学习者有关话语重叠的使用情况。具体以11名中国人高级日语学习者（以下为“CNS”）为研究对象，设定了两个场面：一个是CNS与日语母语者为对象的对方言语接触场面（以下为“对方言语场面”）；另一个是CNS与非日语母语者为对象的第三言语接触场面（以下为“第三言语场面”）。

调查结果如下：「初次见面」谈话中，无论对方是否为日语母语者，CNS的话语重叠未必都是打断对方谈话的负面影响，更多时候CNS的话语重叠行为是对对方谈话的一种补充或认同，推动了双方谈话的顺利开展。另外，谈话对象为非日语母语者即第三言语场面时，CNS的话语重叠频率明显高于与日语母语者交谈的场面。同时，当谈话对象为日语母语者时，CNS的使用倾向多为与对方谈话末尾的“合作性重叠”，会避免“打断性重叠”如插话行为的过多使用；当谈话对象是非日语母语者时，CNS此方面的意识变弱，而更注重积极参与对方的谈话，积极表达自己的观点并提出新话题。因此，这些使用倾向反应了：「谈话对象是不是日语母语者」这一「语言外部因素」会对日语学习者日语使用产生一定的影响。

关键词：话语重叠，对方言语接触场面，第三言语接触场面，日语学习者

1. はじめに

会話は複数の人々によって、話者の交替を繰り返しながら進められていく。通常、会話では一度に1人ずつ話すのがルールである。そのため、会話参加者は、次の話し手へのターンの移行が適切となる箇所、すなわち、「ターン移行適切箇所」(transition relevance place、以下TRP)まで待ってから、次のターンを取得するのが原則である(サックス他2010 / Sacks et al. 1974)。その円滑な話者交替 (turn-taking)¹は、特に初対面の場合、林(2008)によれば、「コミュニケーションの達成」と「良好な人間関係の構築」に密接な関係がある。しかし、実際の会話の中では、複数話者の発話が同時に現れる現象がしばしば起こる。このような現象は「発話の重なり」と呼ばれている。このような「発話の重なり」は、一見話者交替規則に違反するもののように見えるが、会話参加者がその重なりを通じて何らかの行動を達成しようとし、談話展開をさらに進めようとした結果起こるとも考えられる。そこで、本稿では、「初対面」会話における、話者交替の際に起こる「発話の重なり」に注目する。

近年、グローバル化の急速な進展につれて、学習者の日本語使用場面は母語話者との接触場面に限らず、母語の異なる学習者同士が行うインターアクションは教室内外で頻繁に行われている。ファン(2006)は、以上のような、母語話者と非母語話者との接触場面、つまり、参加者のどちらかが相手の言語を用いてコミュニケーションを取る場面を相手言語接触場面(以下、相手場面)と呼び、参加者の双方が自分の言語ではなく第三者の言語でコミュニケーションを取る場面を第三者言語接触場

¹ 話者交替 (turn-taking) とは、会話の構成に見られる最も基本的なシステムの1つで、会話に関与するものが、話し手と聞き手に分かれて義務と権利を行使し、会話に参加することを指す(林2008: 104)。

面（以下、第三者場面）と呼ぶ。村岡（2010）によると、グローバル化の急速な進展は接触場面の多様化を拡大させているだけではなく、そこに参加する当事者の言語管理²にも質的に変化を生じさせている。そこで、接触場面の言語特徴を考察する際に、加藤（2010）や川口（2015）が述べたように、日本語母語話者と非母語話者それぞれの談話の特徴を比較するに留まらず、接触場面の動的側面、特に非母語話者同士の第三者場面の中に立ち現れる個々のミクロな使用実態にも注目すべきではないだろうか。また、「初対面」会話の発話の重なりに関する研究は母語場面及び母語話者と非母語話者との相手場面を扱ったものに限られ、非母語話者同士の第三者場面にはまだ言及されていない。そこで、上記の背景を鑑み、本稿では、日本語母語話者との相手場面及び非母語話者同士の第三者場面という二つの場面を取り上げ、比較分析を行い、対話者が日本語母語話者であるか否かという違いが学習者の発話の重なりにどのように影響するかについて明らかにすることを目的とする。具体的には、中国人上級学習者³（CNS）11名を対象とし、それぞれの会話場面に「初対面」会話を設定して、CNSが会話相手や場面に応じて、どのように発話の重なりを行うのかを考察することにする。

2. 先行研究と研究課題

2.1 先行研究のまとめ

これまで、「初対面」会話における発話の重なりに注目した研究は、母語場面及び日本語母語話者と非母語話者との接触場面を扱ったもので

2 言語管理理論（ネウストプニー 1995）では、「言語管理（Language Management）」は何らかの問題を解決するものであり、「言語問題（language problems）」は規範（norms）からの逸脱によって生じ、留意、評価、調整というプロセスをたどるとされる。

3 調査対象者CNSと会話相手の日本語能力は、滞日期間（1年以上）、学習歴（800時間以上）、日本語能力試験（N1/1級）の資格によって上級と判定した。

ある。

母語場面における発話の重なりに関する研究には町田（2002）、牛田他（2010）、竹田（2016）などがある。町田（2002）は、初対面の会話における発話の重なるの効果に注目した結果、初対面同士の会話において、会話参加者が発話の重なりを利用して相手が提案した話題に関心や共感を示し、お互いの心理的距離を近づけ、会話の継続という共同作業を成し遂げている様子を明らかにしている。牛田他（2010）は、初対面会話における発話の重なりと会話事態の認知の関係性について分析を行っている。その結果、初対面の場合、ぎこちなさを解消したいため、間を作らないように、先行発話の終了付近での重なりが多く観察された。また、発話の重なりが多いほど、重ねられた話者の会話に対する印象や盛り上がり認知得点が高かったという。これは、発話の重なりが会話を促進する作用が大きいという藤井・大塚（1994）や生駒（1996）の研究結果とも一致すると述べている。同じく、竹田（2016）は、初対面同士の会話では距離感や沈黙への気遣いを反映する発話の重なりが多く見られたことを指摘し、さらに、その重なりが内容の共有性を確認する方略に用いられることもあり、会話の進行に寄与していると述べている。以上のことから、初対面同士の日本語母語話者の会話においては、発話の重なりは必ずしも話者交替規則に違反するものではなく、相手の話に対して関心や共感を示し、会話の展開を促進する効果もあると言えよう。

一方、日本語学習者が参加する接触場面を対象とした研究は、長谷川（2005）、劉（2012）などがある。長谷川（2005）は、ある話者の発話の最中に他の会話参加者が発話を開始することにより起こった重なりを、「割り込み発話」と呼び、日本語学習者の割り込み発話の特徴について分析している。その結果、学習者の割り込み発話は、母語話者と比べ、先行話者のターンを支持するための調和系はほとんどなく、先行話

者のターンを妨害するなど、マイナスと捉えられる独立系が多かったと指摘している。そして、学習者の割り込み発話の原因には、意図的に割り込む「自己発話の優先」、母語話者のターン開始のシグナルが分からない「シグナルの不認知」、母語話者の発話が継続するかどうか予測できなかつたりする「TRPの誤認」の3つがあると指摘し、さらに、これらは、日本語学習者の会話予測能力不足が原因であると結論付けている。劉（2012）は、接触場面における学習者の重なりの特徴が母語話者のそれといかに異なるかを分析し、その結果、日本語学習者の発話の重なりは相手の発話を補助するより、自分の発話を優先させるため、母語話者の重なりに比べて不快に感じられやすいと指摘している。これらの研究から、日本語学習者の重なりは、母語話者と比べ、先行話者の発話を妨害するなど、否定的に捉えられるものが多いことが分かった。

以上のように、発話の重なりに関する研究は母語場面及び母語話者と非母語話者との相手場面を扱ったものに限られ、非母語話者同士の第三者場面にはまだ言及されていない。そして、日本語学習者が参加する相手場面を扱った研究の多くは、母語場面と比較することにより学習者の言語行動と母語話者のそれとの違いを分析し、その違いを接触場面における言語問題と捉えるものであった。また、この言語問題は、学習者の言語能力の不足を理由に結論付けられることが多かった。しかし、岩田（2006）、陳・川口（2012）、赤羽（2014・2017）、陳（2017・2019）などの報告にあるように、言語習得を考える上で、話し相手が目標言語の母語話者か否かという要因が学習者内部に生じる日本語のバリエーションに影響を与える可能性は看過できないと考えられる。

2.2 本研究の立場と研究課題

以上を踏まえて、本稿では相手場面と第三者場面におけるCNSによ

る発話の重なりという現象を研究対象とし、対話者が日本語母語話者か非母語話者かという要因が、CNSによる発話の重なりにどのような影響を与えるか明らかにする。具体的な研究課題を以下の2点に設定する。

①相手場面と第三者場面の「初対面」会話においては、CNSによる発話の重なりにはどのような特徴があるか。

②それぞれの場面におけるCNSによる発話の重なりにはどのような違いがあるのか。

3. 調査概要と分析方法

本調査では、会話場面を初対面2者間会話に設定し、会話参加者の社会的属性を統制するために、全データの調査参加者を大学に所属する交換留学生、学部生と大学院生（すべて20代の女性⁴）とした。「初対面」における会話データは、事前に出身地、年齢などの相手に関する情報を一切与えず、自由な話題で20分間会話をするという状況で収録した。具体的には、中国人上級学習者（CNS）11名と初対面関係にある日本人（JNS）7名、韓国人上級学習者（KNS）3名、ドイツ人上級学習者（GNS）2名、マレーシア人上級学習者（MNS）1名、合計6名の日本語非母語話者との2場面14組による自由会話、合計280分の会話を収録した。調査時期は2016年5月～2017年12月までであった。表1に調査参加者のインフォーマントを、表2に会話情報を示す。また、収録した14組の会話データを宇佐美（2006）の「改訂版：基本的な文字化の原則BTSJ」に従って文字化した。

分析の手順としては、まず、相手場面と第三者場面における「初対面」会話のCNSによる「発話の重なり」を分類し、重なり発話と先行

⁴ 筆者の所属している大学の留学生が男性よりも女性のほうがかなり多かったことから女性を調査対象者とした。

発話との関係によってそれぞれの機能を考察する。次に、その出現頻度から両場面の特徴及び違いを明らかにする。

表1 調査協力者のインフォーマント情報

	日本語能力	国籍	母語	性別	年齢	滞日歴	日本語学習歴
CNS1	上級	中国	中国語	女	21	1年	3年2ヶ月
CNS2	上級	中国	中国語	女	21	1年	3年2ヶ月
CNS3	上級	中国	中国語	女	25	2年2ヶ月	5年7ヶ月
CNS4	上級	中国	中国語	女	23	1年8ヶ月	5年2ヶ月
CNS5	上級	中国	中国語	女	23	1年	4年
CNS6	上級	中国	中国語	女	27	3年	6年
CNS7	上級	中国	中国語	女	25	2年8ヶ月	6年1ヶ月
CNS8	上級	中国	中国語	女	25	3年	5年2ヶ月
CNS9	上級	中国	中国語	女	21	3年6ヶ月	3年2ヶ月
CNS10	上級	中国	中国語	女	24	1年7ヶ月	5年7ヶ月
CNS11	上級	中国	中国語	女	21	1年	5年4ヶ月
JNS1	母語話者	日本 (千葉県)	日本語	女	20		
JNS2	母語話者	日本 (群馬県)	日本語	女	20		
JNS3	母語話者	日本 (群馬県)	日本語	女	21		
JNS4	母語話者	日本 (茨城県)	日本語	女	22		
JNS5	母語話者	日本 (群馬県)	日本語	女	20		
JNS6	母語話者	日本 (岐阜県)	日本語	女	20		
JNS7	母語話者	日本 (千葉県)	日本語	女	20		
KNS1	上級	韓国	韓国語	女	21	7年	3年
KNS2	上級	韓国	韓国語	女	21	1年	8年
KNS3	上級	韓国	韓国語	女	21	1年	4年9ヶ月
GNS1	上級	ドイツ	ドイツ語	女	29	1年9ヶ月	3年
GNS2	上級	ドイツ	ドイツ語	女	22	2年	3年8ヶ月
MNS1	上級	マレーシア	マレーシア語	女	22	3年9ヶ月	4年6ヶ月

表2 会話情報

	相手場面	第三者場面
「初対面」会話	「CNS1-JNS1」場面	「CNS1-KNS1」場面
	「CNS2-JNS2」場面	「CNS2-KNS2」場面
	「CNS3-JNS3」場面	「CNS3-KNS3」場面
	「CNS4-JNS4」場面	「CNS8-GNS1」場面
	「CNS5-JNS5」場面	「CNS9-GNS2」場面
	「CNS6-JNS6」場面	「CNS10-GNS2」場面
	「CNS7-JNS7」場面	「CNS11-MNS1」場面

4. 調査結果及び考察

4.1 本研究における発話の重なるの分類

まず、本研究における発話の重なるの分類について説明する。本稿では、サックス他(2010)の話者交替規則をもとに、発話の重なりを「発話冒頭における同時発話」、「発話終了付近における同時発話」、「発話途中における同時発話」の3種類に分類した。具体的な談話例に基づいて、順に以上の発話の重なりについて説明する。

4.1.1 発話冒頭における同時発話

まず、「発話冒頭における同時発話」(以下「発話冒頭」)について説明する。これは、前の話者が発話権を渡した後、2人の会話参加者が同時にターンを開始したために生じた重なりである。

例1 (CNS2の観光について)

263 JNS2: 観光とかをしてない?。

264 CNS2: 観光とかもしましたけど、まあ、研修みたいな感じかな、まあ、みんな一緒に鎌倉と箱根、箱根は関所、箱根関所

(うーん) とあじさい電車《沈黙2秒》。

→265 JNS2 : [<あれ> | < [↑]]。

→266 CNS2 : [<でー> | >]、鎌倉は八幡宮。

例1では、263JNS2の「観光とかをしてない？」という質問に対し、CNS2は264で、箱根や鎌倉を観光したことを答え、ターンを終了した。2秒間という沈黙の後、相手がターンを取らないと思ったCNS2は、次の266で再びターンを取って「でー、鎌倉は八幡宮」と発話を続けている。それと同時に、JNS2は265で「あれ [↑]」と発話を開始したため、発話冒頭で重なりが生じている。このような重なりは、前話者のCNS2が自分の発話を続けようとし、次話者のJNS2が自己選択によってターンを取ろうとしたために起きたものであり、話者間の予測のずれによって生じたものと言える。このように、発話冒頭で起こる重なりは、2人の会話参加者が話者交替が行われる適切な場所、すなわち、TRPで同時にターンを開始したために起こるものであり、会話参加者が話者交替を指向するために起こるものと考えられる。その重なりから、CNSが話者交替規則を指向しながらも、次の話し手になろうという、積極的に会話に参加する姿勢が窺える。

4.1.2 発話終了付近における同時発話

次に、「発話終了付近における同時発話」(以下「発話終了付近」)について分析する。これは先行発話が終了すると予測できる箇所 (TRP)⁵で、もう1人の話者がターンを開始したために生じた重なりである。以下に談話例2を示す。

⁵ 先行発話が終了すると予測できる箇所は、原則としてそこは、ターン移行適切箇所となる (サックス他2010)。

例2 (中国出身の芸能人について)

164 CNS2: じゃ、韓国のアイドルたちは好きですか？。

165 JNS2: 大好きです、EXOが好きです。

166 CNS2: あー。

167 JNS2: 張芸興 [中国語発音] が大好きなんです。

(中略)

170 CNS2: 今中国に帰ったんくですよね>|<|。

→171 JNS2: <そうです>|>、帰りました [<よね>|<|。

→172 CNS2: [<今>|>|中国でもけっこう人気ありますよ。

例2では、JNS2は韓国アイドルグループEXO、特に中国出身のメンバー張芸興のファンであることを話している。CNS2もそのメンバーを知っているため、2人の間に知識の共有性が確立された。それをきっかけに、JNS2が171で「そうです、帰りました」まで言い終わったところで、相手のターンの終了を予測したCNS2は、172で迅速に「今中国でもけっこう人気ありますよ」とそのメンバーに関する話を始めた。こうして、172の「今」は171の発話末尾「よね」と重なっている。このような重なりは、CNS2が先行発話のターンの完結を予測していち早くターンを開始した結果起きたものであり、安井(2017)が指摘するように、参加者が次の話し手になるという話者交替規則を指向するために起こるものである。また、牛田他(2010)は、初対面会話ではごちなさ解消したいために、間を作らないように、発話終了付近での重なりが多くなることを指摘している。このような発話終了付近での重なりから、CNSは話者交替規則を指向しつつも、初対面のごちなさを解消する方向に行動することが観察される。

4.1.3 「発話途中における同時発話」

続いて、「発話途中における同時発話」（以下「発話途中」）について説明する。これは、現話者のターン移行の適切な箇所（TRP）ではないところで、もう1人の話者が発話を挿入したことによって生じた重なりである。本稿では、このような「発話途中における同時発話」を「割り込み発話」と呼ぶ。

例3（KNS3の学年について）

34 CNS3：<え、今>|>は何年生ですか？。

→35 KNS3：今はですねー、えっと韓国で3年までやってここ来て、また来年は【【】。

→36 CNS3：【】よ、4年<生>|<|。

37 KNS3：<4>|>年生ぐらいです。

例3では、34CNS3の「え、今は何年生ですか？」という質問に対して、KNS3が35で「今はですねー、えっと韓国で3年までやってここ来て、また来年は」と答えたところで、CNS3は36で「よ、4年生」と発話を挿入し、KNS3の発話を中断させている。CNS3の発話は、KNS3の文の産出過程で挿入された割り込みで、話者交替規則に違反するものであると言える。

4.2 両場面における発話の重なりの特徴

以上のようなCNSによる発話の重なり、特に割り込み発話には、相手場面と第三者場面においてはどのような特徴と違いがあるのだろうか。まず、両場面における発話の重なりの分類ごとの頻度から量的に分析してみる。初対面の相手に対するCNSによる発話の重なりの出現率を表

3-1に示す。

表3-1 両場面における「初対面」会話の発話の重なり

	発話数 (%)			
	発話冒頭	発話終了付近	発話途中	合計
相手場面	36 (16.6)	70 (32.3)	111 (51.2)	217 (100.0)
第三者場面	39 (15.0)	57 (21.9)	164 (63.1)	260 (100.0)
合計	75 (15.7)	127 (26.6)	275 (57.7)	477 (100.0)

($\chi^2(2) = 7.853, p < .05$)

表3-1に示したように、「初対面」会話のCNSによる「発話の重なり」を分類すると、相手場面であれ、第三者場面であれ、「発話途中」の重なりが最も多く、次いで「発話終了付近」「発話冒頭」の順に生じた。

この結果について χ^2 検定を行ったところ、5%水準で有意であった($\chi^2(2) = 7.853, p < .05$)ことから、「初対面」の場合、「発話の重なり」には相手が日本語母語話者であるか否かが影響することが把握された。

さらに、その残差分析を行った結果を表3-2に示す。

表3-2 残差の一覧表

	発話冒頭	発話終了付近	発話途中
相手場面	0.5n.s.	2.5*	-2.6**
第三者場面	-0.5n.s.	-2.5*	2.6**

(n.s. : not significant, * $p < .05$, ** $p < .01$)

表3-2から、「初対面」会話において、「発話終了付近」の重なりは相手場面で有意に多く、「発話途中」の重なりは第三者場面で有意に多いことが分かった。「発話冒頭」の重なりは両場面には有意差が見られ

なかった。では、「初対面」の場合、以上のような、両場面における発話の重なり分類ごとの頻度の違いは何を物語っているのだろうか。

4. 1で紹介したように、「発話終了付近」での重なりから、CNSは話者交替規則を指向しつつも、初対面のぎこちなさを解消する方向に行動することが観察される。このような重なりは、相手場面の方が第三者場面より有意に多く起こっていたことから、初対面の場合、CNSは相手場面では相手が母語話者であることを意識し、話者交替規則を指向しつつも、ぎこちなさを解消する方向に行動して、「発話終了付近」での重なりが多くなることが示唆される。一方、「発話途中」すなわち「割り込み発話」は、話者交替規則に違反するようなものであり、このような重なりが第三者場面で有意に多いことから、第三者場面の方が話者交替規則への配慮より、積極的な会話参加に意識が傾いていることが示唆される。

一方、例3に示したように、「割り込み発話」は継続中の発話を途中で中止に追い込む場合が多く、スムーズな話者交替の妨げになるため、初対面の場合は特に情報の伝達と会話の進行に支障を来す危険性が高くなる。それにもかかわらず、CNSはなぜそのタイミングで割り込みを行ったのだろうか。その「割り込み発話」が起きる状況を明らかにするために、劉（2012）⁶を参考にし、「割り込み発話」を「協調的な割り込み」と「支配的な割り込み」の2つに分類して分析した。両場面における各割り込み発話の出現率を表4-1に示す。

⁶ 劉（2012）は割り込み発話と先行話者の「フロア」（すなわち、話の主導権）との関係を基準にして「割り込み発話」を「フロア内での割り込み」と「新たなフロアを築く割り込み」に分類している。前者は、相手の発話への共感などを示し、相手の発話を補助する「協調的な割り込み」であり、後者は先行話者の発話権を奪い、相手の発話を妨害する「支配的な割り込み」であるという。

表4-1 両場面における「初対面」会話の割り込み発話

	発話数 (%)		
	協調的な割り込み	支配的な割り込み	合計
相手場面	103 (92.8)	8 (7.2)	111 (100.0)
第三者場面	139 (84.8)	25 (15.2)	164 (100.0)
合計	242 (88.0)	33 (12.0)	275 (100.0)

($\chi^2(1) = 4.049, p < .05$)

表4-1に示したように、「初対面」の場合、相手場面であれ、第三者場面であれ、「協調的な割り込み」の方が「支配的な割り込み」より圧倒的に多いことが分かる。

この結果について χ^2 検定を行ったところ、5%水準で有意差があった($\chi^2(1) = 4.049, p < .05$)ことから残差分析を行った。表4-2に示した残差分析の結果、「協調的な割り込み」は相手場面で有意に多いのに対し、「支配的な割り込み」は第三者場面で有意に多いことが分かった。

表4-2 残差の一覧表

	協調的な割り込み	支配的な割り込み
相手場面	2.0*	-2.0*
第三者場面	-2.0*	2.0*

(* $p < .05$)

では、以上のような、両場面における「初対面」会話の「割り込み発話」が起きる状況の違いは、何に起因するのだろうか。その要因を明らかにするために、以下、4.2.1で「協調的な割り込み」について、4.2.2で「支配的な割り込み」について談話の質的分析を試みることにする。

4.2.1 「協調的な割り込み」

まず、相手場面で有意に高い「協調的な割り込み」について分析する。「協調的な割り込み」とは、割り込んだ話者が先行話者の発話の途中で、評価や感想、補足などの割り込む発話によって、先行話者の発話を補助することを指している。さらに、それは「①評価・感想」「②情報付加・補足」「③共話作り」「④質問・確認」の4つに下位分類された。相手場面と第三者場面においてそれぞれ分類した結果を、表5に示す。

表5 両場面における「初対面」会話の「協調的な割り込み」

	発話数 (%)				
	①評価・感想	②情報付加・補足	③共話作り	④質問・確認	合計
相手場面	53 (51.5)	18 (17.5)	19 (18.4)	13 (12.6)	103 (100.0)
第三者場面	51 (36.7)	29 (20.9)	41 (29.5)	18 (12.9)	139 (100.0)
合計	104 (43.0)	47 (19.4)	60 (24.8)	31 (12.8)	242 (100.0)

($\chi^2(3) = 6.269$ n.s.)

表5に示したように「初対面」会話において、相手場面、第三者場面ともに、「①評価・感想」が最も多く、次いで「③共話作り」、「②情報付加・補足」、「④質問・確認」の順であった。この結果について χ^2 検定を行ったところ、①②③④は両場面に有意差がなかった。以下、順にそれぞれ談話例を挙げて分析する。

①評価・感想

これは、相手の発話内容に対して同意、共感、関心などを表すコメントや感想を示すために、聞き手が相手のターンの終了を待たずに発話を開始するものである。

例4 (ドイツ語の「名詞の性」について)

152 GNS2: あードイツ語はまあ英語には似てるけど (はい)、あの
余計なものがいっぱいある。

153 CNS10: 余計な (笑い)、余計なものですか。

154-1GNS2: そう、例えば (はい) 女の子はもう (はい) 女子だよね
(はい)、でもなんか、あのう、なんか、

155 CNS10: <年齢>{<|?}?。

154-2GNS2: <あのう>{>|}、その前にあのう、つける言葉があるん
だけど (あーはい)、で、それ、その前についての言葉
で (はい) 後の言葉が男子か女子なのか分かるだけど
(はい) 女の子は女子でも男子でも何でもないので。

156 CNS10: えー [↑]。

→157-1GNS2: なんか、[<あのう>{<|}、

→158 CNS10: [<面白い>{>|}。

157-2GNS2: うん、性別ないって (笑い)。

159 CNS10: ふふふ (笑い) あー、そうなんですか。

例4はドイツ語の「名詞の性」に関する談話である。GNS2は154-1と154-2で、名詞冒頭につける冠詞によってその名詞が男性名詞か女性名詞か見分けることができるが、「女の子」という名詞は中性名詞であることを説明している。GNS2のその発話に対して、CNS10は、まず156で「えー」と言って驚いた気持ちと関心を表している。続いて、GNS2が157-1「なんか」というフィラー⁷によってターンを維持してさ

7 「フィラー」とは、「発話の一部分を埋める音声現象や語句のことを指し、それ自身は命題内容、及び、他の発話との(狭義の)応答関係・接続関係・修飾関係を持たない」(林2008: 131)。

らに詳しく説明しようとしたところで、CNS10は158で「面白い」と言って、GNS2の発話内容に対して評価と感想を表し、GNS2の157-1「あのう」と重なっている。しかし、その割り込みによってGNS2は話を中断することなく、157-2で「うん」と応じて、「性別ないって」と笑いながら発話を続けている。CNS10も159で笑いながら、「あー、そうなんですか」と理解したことを示している。このように、158の「面白い」のような、先行発話に対する評価・感想を述べるような割り込みは、会話参加者には障害とは見なされていないことが分かる。このような割り込みは、相手のターンを取ることなく、相手の発話に対する関心を積極的に表明するために行われたのだろう。熊谷・木谷（2010）が指摘するように、「初対面」の場合、相手の発話に関心や評価を表すことによって、参加者間の共感が深まり、心理的距離を接近させることにつながると考えられる。

「①評価・感想」の割り込みは、相手場面では51.5%（53話）、第三者場面では36.7%（51話）で、両場面ともに最も多く用いられていた。

②情報付加・補足

これは、話し手が文末まで言い終わる前に、聞き手が先行発話に関連する情報を付け加えて、相手の発話を補足するものである。

例5（別科生と一緒に受ける授業について）

109 CNS10：授業が1回だけ??、2回??、そうですね、でもみんなと一緒に旅行に行ったんですね。

110 GNS2：そう、春学期ではね、それで（はい）そこで仲良くなった。

111 CNS10：あーそうなんですか。

→112-1 GNS2：なんかいろんなとこに行ったり（はい）して、あと水

曜日の1限でも、た、[<た>|<|,,

→113 CNS10 : [<多>|>| 言語??。

112-2GNS2 : 多文化理解演習 [↑]。

114 CNS10 : あ、〇〇先生の(そうそう)授業ですか?。

115 GNS2 : あれ、でも一緒になってるから。

116 CNS10 : はい、えー。

117 GNS2 : あの、多言語でも。

118 CNS10 : <多言語>|<| [↑]。

119 GNS2 : <多言語>|>| 交流室、けっこういいところだね(笑い)。

例5では、CNS10とGNS2が、交換留学生と別科生と一緒に授業を受けたり旅行に行ったりして仲が良いことについて話している。GNS2は112-1で、ある授業を別科生と一緒に受けていることを話そうとしたが、その授業名が思い出せずに、「た、た」と繰り返して自分のターンを維持している。そのとき、CNS10は113で「多言語??」と、関連情報を補足して積極的に相手を助けようとした。しかし、続くGNS2の112-2「多文化理解演習」という発話から、CNS10の補足した情報がはずれていたことが分かる。このように、「初対面」の場合、相手に関する情報を持っていないので、予測がはずれる可能性が高いが、それにもかかわらず情報補足のために割り込みが行われている。このことから、「初対面」の場合、CNSが相手の発話に関心を示し、共有情報を模索しながら積極的に会話を進めようとしている様子が窺える。また、続く117行目以降の発話に注目すると、CNS10の補足した「多言語」という情報をきっかけに、会話の話題が「多言語交流室」に向かったことが分かる。これは、情報を補足する割り込みは、会話の進行を妨げず、逆に会話の進行に役に立つことがあることを示している。このような割り込みは、竹田

(2016 : p.96) によれば、初対面という、事前にコンテキストを共有していない参加者同士の間で、当座の対話内で共有情報を模索し、それをきっかけに話を進めるためのものと言える。

「②情報付加・補足」の割り込みは、相手場面では17.5% (18話)、第三者場面では20.9% (29話) であった。

③共話作り

これは、話し手が話している途中で、聞き手がその発話の残りの部分を予測して、それを相手が言う前に先取りして、2人の会話参加者が共同で一つの発話を作りあげていくものである。

例6 (JNS4の外国人との接触経験について)

→67 JNS4 : でも、本当大学入る前までは、[<あん>|<| 【】。

→68 CNS4 : 【】 <接>|>|触経験がない
<ですな>|<|。

69 JNS4 : <うん>|>|、ない、中国人とまずない。

70 CNS4 : 文教大学中国人が多いですよ (笑い)。

→71 JNS4 : 中国人が多くてー (うん)、だから一番はじめに話した中国人が去年の、えー、[<おとし>|<| 【】。

→72 CNS4 : 【】 <交換留学生>|>|。

73 JNS4 : そう、交換留学生の「〇〇」とか 【】。

74 CNS4 : 【】 「〇〇」?。

75 JNS4 : たぶん分からない<と思うけど>|<|。

76 CNS4 : <分からないですな>|>|。

例6では、JNS4が外国人との接触経験について話している。CNS4は、

68と72でJNS4の発話を先取りして共話の形を作ろうとしている。まず、JNS4が67で「でも、本当大学入る前までは」と1文の従属節を話したところで、CNS4は先取りをして、68で「接触経験がないですね」と主文をつづけて発話を完結した。69JNS4の「うん、ない、中国人とまずない」という肯定の応答から、68ではCNS4の先取りの予測がうまくいったと言える。また、JNS4が71で「中国人が多くてー、だから一番はじめに話した中国人が去年の、えー」とフィラーによってターンを維持しているときに、CNS4は先取りをして、72で「交換留学生」と述語を述べて発話を完結した。72CNS4の先取りに対して、JNS4は73でまず「そう」と、肯定の応答が返されているが、続く「交換留学生の「〇〇」とか」という発話から、JNS4が71で言おうとしたのは「一番はじめに話した中国人がおとしの交換留学生の「〇〇」」であったことが分かる。

熊谷・木谷（2010）によれば、互いの情報を持たない初対面の場合、予測がはずれる危険性は高くなるが、それにもかかわらず相手の発話を先取りして「共話」の形を作ろうとする行為が行われる理由の一つは、単なる相づちに比べて、先取りが相手に対して積極的な関心を表明する有効な手段にもなるからであるという。このように、「共話作り」は、2人で一つの文を完成させることで、「初対面」会話の参加者間に連帯感を生み、心理的距離を縮めることにつながると言える。

「③共話作り」による割り込みは、相手場面では18.4%（19話）、第三者場面では29.5%（41話）で、どちらも2番目に多かった。

④質問・確認

これは、話し手が話している途中で、聞き手がその発話や話題に対して質問や確認を挿入するものである。

例7（中国の小学校の視察について）

274 CNS3：中国のどこですか？。

→275-1JNS3：あー、どこだっけな、詳しい日程も送られてきていないんですけど、[<なんか、昨年度の>|<|,

→276 CNS3： [<何省ですか？>|>|。

275-2JNS3：日程を送ってもらったのがあって、それは実験学校とか、実験学校（んー）っていう学校があるんですかね？、（んー）実験学校って書いてあった。

277 JNS3：上海。

278 CNS3：あっ、上海<ですか>|<|。

例7で、JNS3は中国の英語教育の盛んな小学校へ視察に行くことを話している。274のCNS3の「中国のどこですか?」という質問に対して、JNS3がその地名をすぐに思い出せず、275-1で「あー、どこだっけな、詳しい日程も送られてきていないんですけど」と答えを考えている途中で、CNS3はさらに、276でやや速いスピードで「何省ですか?」と割り込んだために、JNS3の275-1発話の一部「なんか、昨年度の」と重なっている。しかし、CNS3の割り込みによって、JNS3は発話を中断させることなく、275-2で「日程を送ってもらったのがあって」とそのまま話を展開しつつ、「実験学校って書いてあった」と記憶をたどって発話している。その後、JNS3はその地名を思い出して277で「上海」と言って、CNS3の質問に答えている。

このような「④質問・確認」の割り込みは、相手場面では12.6%（13話）、第三者場面では12.9%（18話）で、ほぼ同様の割合であった。

以上の「①評価・感想」「②情報付加・補足」「③共話作り」「④質問・

確認」の発話内容を見ると、これらのような「協調的な割り込み」は、相手のターンを取るわけではなく、相手の発話に対する関心を示し、内容の共有性を確認するための方略として用いられていることが分かる。それにより相手との連帯感と共感が深まり、協調的な人間関係の構築につながると考えられる。「初対面」の場合、このような「協調的な割り込み」は、相手場面の方が第三者場面より有意に多かった。

4.2.2 「支配的な割り込み」

次に、第三者場面で有意に多い「支配的な割り込み」について分析する。「支配的な割り込み」とは、割り込んだ話者が先行話者の発話の途中で、先行話者の内容と関連性が弱い情報、または新しい情報を挿入することによって、先行話者からターンを取って、その後、常に割り込み発話をめぐって会話全体を新たな方向へ導くことを指している。それには「⑤新情報の提示」がある。以下にその談話例を示す。

⑤新情報の提示

例8 (CNS3が日本で起業することについて)

185 KNS3：服屋さんちょっと。

186 CNS3：いやーでも、それは日本ではちょっと難しいかも。

187 KNS3：かもねー。

188 CNS3：うん。

→189 KNS3：かもですねー、うん、まあ、たしかに [声が小さくなる]
これもほんと [<むずか>|< 【】。

→190 CNS3： 【】 <えっ>|<、[自分のズボンを指して] これは韓国 (えー!)、Made in Korea (笑い)。

191 KNS3：えー！どこで買ったんですか？あ、日本で買ったんです

か？。

192 CNS3：いや、中国で。

193 CNS3：でもあの一、中国は今いろいろなあの一は韓国に行つて、あの一、洋服を買うために韓国に行つて、あの一、(あ、あ、そうなんだ)韓国で買ってきたら(え一)にゆ、中国で販売するという形。

194 KNS3：あーあーなるほど(笑い)。

例8はCNS3が日本で起業することに関する談話である。KNS3の服屋さんの商売という提案に対して、CNS3は186で「いやーでも、それは日本ではちょっと難しいかも」と自分の意見を述べている。その意見に対して、KNS3が187で「かもねー」とCNS3の発話の一部を繰り返して同意を示しており、CNS3が188で「うん」と応じている。その後、KNS3が189で「かもですねー、うん、まあ、たしかにこれもほんとむずか」まで述べたところで、CNS3は、190で「えっ」と割り込んで、自分のズボンを指しながら「これは韓国、Made in Korea」という新情報を持ち出して、KNS3の発話を中断させている。KNS3は中断された自身の発話を継続せず、続いて191で「えー！」と驚く気持ちを表して「どこで買ったんですか？あ、日本で買ったんですか？」とCNS3に質問している。CNS3はそれに対して、192で「いや、中国で」と答え、193で中国では韓国製の洋服を販売する人が多いと詳しく説明している。この談話では、CNS3の割り込んだ「自分のズボンが韓国製である」ことをめぐって会話が活発化していくことが示されている。

「初対面」会話における「⑤新情報の提示」の割り込みは、第三者場面の方が相手場面より有意に多く起こっていた。このことから、CNSは第三者場面の方が新しい情報を提示することによって話題を継続させ、

積極的に会話を進めようとする傾向が強いことが分かった。

5. 総合考察

以上、相手場面と第三者場面における「初対面」会話のCNSによる「発話の重なり」について分析した。その結果、次のことが分かった。

まず、CNSによる「初対面」会話における「発話の重なり」は、相手場面、第三者場面ともに「発話途中」の重なりが最も多く、次いで「発話終了付近」「発話冒頭」の順に生じていた。さらに、「発話途中」すなわち「割り込み発話」が生じた談話を分析すると、両場面ともに「協調的な割り込み」の方が「支配的な割り込み」より圧倒的に多かった。CNSは両場面ともに「評価・感想の表出」、「情報補足」、「共話作り」などの重なりを通じて、相手の話に対して関心を示したり、内容の共有性を伝えたりして相手とともに協働的に会話を進めようとすることが窺える。つまり、「初対面」会話においては、CNSによる「発話の重なり」は、相手に関心を示し、会話を円滑にかつ協働的に進行させる手段の一つと考えられる。

さらに、CNSによる「発話の重なり」の場面差に注目すると、相手場面では「発話終了付近」の重なりが有意に多く、第三者場面では「発話途中」の重なりが有意に多いことが分かった。さらに、「発話途中」すなわち「割り込み発話」の談話を分析した結果、相手場面では「協調的な割り込み」が有意に多いのに対して、第三者場面では「支配的な割り込み」が有意に多いことが分かった。つまり、相手場面での重なりは「発話終了付近」に多く生起し、「協調的な割り込み」が有意に多いのに対して、第三者場面での重なりは「発話途中」に多く生起し、「支配的な割り込み」が有意に多い。この結果から、「初対面」の場合、相手場面においてCNSは、相手が母語話者であることを意識し、初対面のぎ

こちなさを解消したい気持ちが強くなるために、話者交替規則を指向して「発話終了付近」の重なりが多用され、また、対人的な連帯感の表出や協調的な人間関係構築を優先するために、「協調的な割り込み」が多用されることが推測される。それに対して、第三者場面では、話者交替規則に配慮することよりも、積極的な会話参加に意識が傾くために、新情報を加えるなどして会話の進行をさらに進めようとするによって、「支配的な割り込み」が多用されることが推測される。

それでは、非母語話者CNSが相手に応じて異なる言語行動を行うことには、どのような要因が働いているのであろうか。

ファン（2011）は、「相手言語接触場面と違って、第三者言語接触場面では日本語規範⁸が適用されたとしても、言語規範⁹自体は過度に強調されることはない。そのために、逸脱かどうか（留意）、問題がないかどうか（評価）、調整すべきかどうか（計画、実施）など一連の言語管理が比較的緩くなり、結果として第三者言語接触場面の外国人は自分の言語を使っていないにもかかわらず、ある程度緊張から解放され」（p.49）と述べている。また、赤羽（2014）は、接触場面における日本語非母語話者の心理面の調節を分析し、母語話者との相手場面で特に意識されるのは相手に気をつけて問題化しないようにする配慮であるが、第三者場面で特に重視される配慮の一つは、明瞭な自己表現に関することであることを指摘している。本研究の調査結果を、ファン（2011）及び赤羽（2014）に照らし合わせて考えると、相手が母語話者である相手場面では、非母語話者は、問題を避けようとする意識が強くなるため

⁸ 加藤（2010）によると、日本語規範が、従うべき行動基準の一群であると解釈されたり、文法規則や音声規則のような、日本語教育のシラバス内容を選択するための基準と容易に結び付けられやすいという。

⁹ ファン（2010）では言語規範は「あるコミュニティまたは集団の中で、ある場面またはある目的のために適切などと思われる話し方、書き方」（p.83）と定義している。

に、話者交替に問題が起こらないように、「支配的な割り込み」を控えたりするなどの、対人関係と円滑な会話成立を優先する言語行動を取りやすいと考えられる。それに対して、非母語者同士の第三者場面においては、会話参加者は、目標言語の言語規範と対人関係という負担から解放され、不安や緊張が緩和され、積極的に自己表現しようとする意識が働くために、自分の言いたいことを率直に表出し、会話に対する積極性を示す言語行動を取りやすいのではないだろうか。それによって、第三者場面の方が相手場面より会話参加が活性化されていると考えられる。

さらに、第三者場面で有意に多く生じた「新情報の提示」のような「支配的な割り込み」の場合、例8に示したように、CNSがいきなり自分の言いたいことを相手の発話に挿入するわけではなく、発話冒頭で「えっ」のような言語要素を用いたりした後に自分の言いたいことを続けることが多く観察された。「えっ」のような、発話順番の冒頭における言語要素は、申田他（2017）では「発話順番冒頭の要素」と呼ばれ、「これらの要素は、発話順番冒頭の位置において、先行発話に対するさまざまなスタンスや接続のあり方を示す重要な資源」（p.147）となり、円滑な会話の進行にとって重要な役割を担うものとされている。CNSは、相手の発話に割り込む際に、「発話順番冒頭の要素」を上手に用いることによって、会話の進行を円滑に進めていると言えよう。「新情報の提示」のような「支配的な割り込み」は、これまでは、先行話者の発話を妨害するなど、言語問題として否定的に捉えられることが多かった。しかし、本調査では、その状況の談話内容を質的に分析した結果、それは、CNSが新しい情報を加えようとして「割り込む」のであり、積極的に会話に参加しようとする姿勢の現れと捉えられるのではないだろうか。この捉え方の違いについて次のような推測が可能であろう。これまでの研究では割り込まれた話者の立場から「新情報の提示」のような割

り込みを考察している。割り込みによって、現在進行中の発話が中断される現象に注目しているが、なぜ割り込んだ話者はそれが適切な行為のようにふるまっているのかについてはあまり議論されていない。その結果、割り込み発話は現在進行中の話し手のターンを侵害する行為と解釈される。一方、本研究では割り込んだ話者の立場から分析を行っている。割り込んだ話者がなぜ「新情報の提示」のような割り込みを行ったか、さらにその割り込みを通じてどのような言語行動を達成しようとするかについて考察している。その結果、割り込んだ話者が新情報を提示することによって話題を継続させ、積極的に会話を進めようとする時にも割り込み発話を用いるが、その場合は、「えっ」のような標識を伴うことが分かった。このような割り込み発話は会話の進行に関わる要素であり、会話の展開をさらに推進する言語行動にもなりうると考えられる。以上のような二つの捉え方には、「言語問題を誰の立場から見るのか、また問題のどこに注目するのかといった視点が反映されている」（高2016：p.20）と言えよう。

今回は、「初対面」会話における発話の重なりという視点から、相手場面と第三者場面における非母語話者の会話参加の様相について考察を行った。今後は、話題導入の頻度や話題導入の形式に注目し、両場面における会話参加の特徴について考察を行いたい。

〈参考文献〉

- 赤羽優子（2014）「日本語非母語話者の日本語接触場面における心理面の調節」『計量国語学』29（5），pp.131-153
- 赤羽優子（2014）「第二言語としての日本語使用者同士のカテゴリー化実践—第三者言語接触場面の対称的なやりとり注目して—」『国際日本研究』9 筑波大学人文社会科学研究科国際日本研究専攻，

pp.83-105

- 生駒幸子 (1996) 「日常会話における発話の重なるの機能」『世界の日本語教育』6 国際交流基金日本語国際センター, pp.131-153
- 岩田夏穂 (2006) 「日本語非母語話者同士の参加の様相—留学生の自由会話の場合—」『人間文化論叢』9 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科, pp.175-187
- 宇佐美まゆみ (2006) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese : BTSJ) 2005年2月25日改訂版」『自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』言語情報学研究報告13、東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」, pp.21-46
- 牛田梨恵香・小川一美・斉藤和志 (2010) 「親密性の違いに着目した発話の重なり方と会話事態の認知」『愛知淑徳大学論集—コミュニケーション学部・心理学研究科篇—』10 愛知淑徳大学コミュニケーション学部, pp.113-124
- 加藤好崇 (2010) 『異文化接触場面のインターアクション：日本語母語話者と日本語非母語話者のインターアクション規範』, 東海大学出版会
- 川口良 (2015) 「日・中・韓接触場面における討論の分析—談話における「逸脱」に注目して—」『文学部紀要』29 (1) 文教大学文学部, pp.1-36
- 串田秀也・平本毅・林誠 (2017) 『会話分析入門』勁草書房
- 熊谷智子・木谷直之 (2010) 『三者面接調査におけるコミュニケーション—相互行為と参加の枠組み—』くろしお出版
- 高民定 (2016) 「接触場面における言語問題と問題分析」村岡英裕・ファン, S.K.・高民定編『接触場面の言語学—母語話者・非母語

- 話者から多言語話者へ―』, ココ出版, pp.19-36
- サックス, H.・シエグロフ, E.A.・ジェファソン, G. (2010) 『会話分析基本論集：順番交替と修復の組織』 西阪仰訳 世界思想社
(Sacks, H., Schegloff, E.A., & Jefferson, G. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50 (4), pp.696-735)
- 竹田らら (2016) 「重複発話から創出される協調性—親疎が異なった日本語相互行為の異ジャンル間比較からの一考察—」 『社会言語科学』 19 (1) 社会言語科学会, pp.87-102
- 陳新・川口良 (2012) 「中国語を母語とする日本語上級学習者の文末スタイルシフトに関する一考察」 『言語と文化』 25 文教大学, pp.70-100
- 陳新 (2017) 「中国語を母語とする日本語上級学習者の割り込み発話に関する一考察—相手言語接触場面と第三者言語接触場面の比較—」 『言語文化研究科紀要』 3 文教大学大学院言語文化研究科, pp.21-50
- 陳新 (2019) 「中国人上級学習者の相手言語接触場面と第三者言語接触場面におけるスピーチレベル管理について」 『言語文化研究科紀要』 5 文教大学大学院言語文化研究科, pp.33-58
- 長谷川紀子 (2005) 「日本語学習者の割り込み発話」 『千葉大学日本文化論叢』 6 千葉大学文学部日本文化学会, pp.105-90
- 林宅男 (2008) 『談話分析のアプローチ—理論と実践—』 研究社
- ファン, S.K. (2006) 「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」 『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—』 独立行政法人国立国語研究所編, 株式会社アルク, pp.120-137

- ファン, S.K. (2010) 「異文化接触—接触場面と言語—」西原鈴木編『言語と社会・教育』朝倉書店, pp.75-99
- ファン, S.K. (2011) 「第三者言語接触場面と日本語教育の可能性」『日本語教育』150, pp.42-55
- 藤井桂子・大塚純子 (1994) 「会話における発話の重なりについて：協力的側面を中心に」『言語文化と日本語教育』8 お茶の水女子大学日本語言語文化学会, pp.1-13
- 町田佳世子 (2002) 「初対面の会話における発話の重なる効果」『北海道東海大学紀要人文社会科学系』15 北海道東海大学, pp.189-210
- 村岡英裕 (2010) 「接触場面の変容と言語管理：接触場面の言語管理研究vol.8」, 『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』vol.228, 千葉大学大学院人文社会科学研究科
- 町田佳世子 (2002) 「発話と活動の割り込みにおける参与—話し手の振る舞い「について」の描写が割り込む事例から—」片岡邦好・池田佳子・秦かおり編『コミュニケーションを枠づける—参与・関与の不均衡と多様性』くろしお出版, pp.155-175
- 劉佳珺 (2012) 「会話における割り込みについての分析：日本語母語話者と中国人日本語学習者との会話の特徴」『異文化コミュニケーション研究』24 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所, pp.1-24